

### 31. 迷走神経内アドレナリン作動性神経線維に関する蛍光組織化学的研究

京大 第2外科<sup>1)</sup> 薬理<sup>2)</sup>

°大隅喜代志<sup>1)</sup>・藤原元始<sup>2)</sup>

組織化学的蛍光法によって、ラットの胃壁を観察すると、カテコールアミン蛍光性神経終末は、壁内血管周囲、筋層内神経叢周囲、ならびに筋層に分布する。これらの蛍光は、腹腔神経叢切除によって消失したが、胃噴門部の一部と食道の蛍光は残存した。しかしこれも、両側迷走神経切除術の併用によって完全に消失した。

迷走神経を腹部において結紮後には、結紮部頭側に蛍光物質が発現したが、頸部において、節状神経節の頭側端または尾側端で結紮した際には、蛍光物質は発現しなかった。上頸交感神経節の尾側端において、交感神経幹とともに迷走神経を結紮した結果、蛍光線維は、交感神経幹を発して迷走神経に侵入する像が見られた。しかし上頸交感神経節を切除すると、迷走神経内に蛍光物質は発現しなかった。以上から、迷走神経内のアドレナリン作動性神経線維は、上頸交感神経節に発し、その一部が、腹部食道ならびに胃噴門部に分布すると結論した。

### 32. 蛍光法による股関節包アドレナリン作動性神経の検出

京大 整形外科<sup>1)</sup> 薬理<sup>2)</sup>

°小西敏博<sup>1)</sup>・田中清介<sup>1)</sup>

田中千賀子<sup>2)</sup>・藤原元始<sup>2)</sup>

慢性関節リウマチおよび変形性股関節症の疼痛緩解のためには交感神経遮断が効果的であるとされるが、このことは股関節部に交感神経が分布し、疼痛に関与することを示唆するものである。

われわれは股関節におけるアドレナリン作動性神経の局在を確かめるために、ネコ、ウサギ、ラット、イヌの関節包について蛍光組織化学的検索を行なった。カテコールアミン蛍光は関節包血管の外膜に認められ、その分布密度は線維層に最も多く、ついで靱帯層、滑膜層の順である。また後方関節包に比し前方関節包に多く、とくに前下方で最も豊富であり、後下方で最も少い。腰仙部交感神経慢性切除術によりこれらカテコールアミン蛍光は消失または減弱し、関節包の血管が交感神経性アドレナリン作動性線維の支配を受けることが示された。しかも前方関節包は片側（同側）交感神経支配を受けるのに対し、後方関節包は両側交感神経支配を受けることが明らかにされた。